

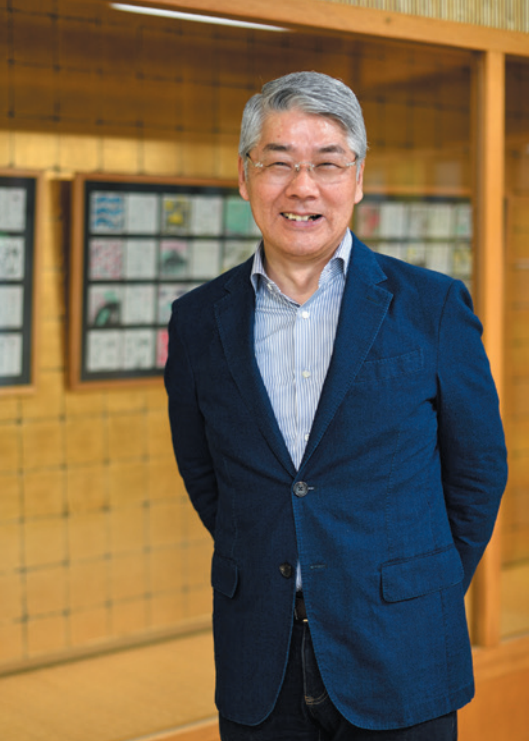
地域の底力—— 神山町

人が人を呼び 互いに触発する 人間交差点 徳島県神山町



「よそ者」を受け入れる
緩やかな心が育まれた
山あいの小さな町で、
新たな出会いの数々が
人々の意識をゆつくりと変え、
未来の物語を紡いでいく。





NPO 法人グリーンバレー理事長の大南信也氏は建設業を営む傍ら、国際交流などの地域活動に取り組む。20代の頃にスタンフォード大学院で学び、黎明期のシリコンバレーの自由な空気にふれた体験が、大南氏の原点になっている。

すべてののはじまりは 青い目の人形から

徳島県のほぼ中央部、山々に囲まれた神山町の誕生は、五村が合併した一九五五年にさかのぼる。一帯の歴史は古く、阿波の語源とも伝えられる「粟生の里^{あわふ}」としてはるか古代から交流の拠点だったという。

合併当時、約二万人だった人口は現在、約五四〇〇人。年々過疎化が進んでいたが、近年になり移住者が少しずつ増え、二〇一一年にはわずか二人ながらも転入が転出を上まわる状況となった。自然豊かなのどかな田舎という感のある町を歩けば、洒落た飲食店やモダンアートが点在。東京等のI

T企業はか一六社がサテライトオフィスを構え、海外からもクリエイターたちが訪れるとは、この小さな町でなにが起きているのだろうか。

そもその発端は一体の人形だったと振り返るのは、移住支援を中心とした活動に取り組むNPO法人グリーンバレー理事長大南信也氏だ。一九二七年、友好の象徴としてアメリカから約一万二〇〇〇体の人形が日本各地に送られた。多くは戦時中に処分されたが、神山町の青い目の人形アリスが奇跡的に難を逃れたのを知り、大南氏は現地の協力を得てその贈り主を探す。一九九一年には、アリス、一〇名の子どもたちとともに訪問団がペンシルバニア州を訪れ、人形の里帰りが実現した。

「おもしろかった。何かが動き始めるかもしれない。そんな流れができました。成功体験を経て、また何かやりたいという思いが関係者のなかに生まれたんです」

一九九二年には「神山町国際交流協会」を設立し、徳島県内に赴任したALIT（外国語指導助手）を民泊で受け入れる試み「神山



二〇一二年のアーティスト・イン・レジデンスで招聘された、出月秀明氏の作品「Hiden Library」。本を収めた神山町民だけが鍵を持つことができる。

ウィークエンドプログラム」が始まる。

「約五〇名の外国人が、町に滞在する。最初は目立つ異質な存在でしたが、毎年行われるうちに、それが風景の一部と化して当たり前になってきました」

外国人とのつきあいに町の人々が次第に慣れていくなか、一九九九年から「アーティスト・イン・レジデンス」を展開。国内外のアーティストを公募して町に招聘^{しょうへい}し、数カ月にわたり作品作りに取り組んでもらう、今も続くプログラムだ。

一年目は外部の学芸員の力を借



りて既に名のあるアーティストを招いたが、神山だから来た、との思いが感じられなかったことから方向転換を図る。

「僕らはもともと国際交流からスタートしていましたが、アーティストといろいろなやりとりをする中で一緒にあって作品を残したいとの思いがあったんです」

二年目からは学芸員に頼ることなく自分たちで公募を仕切ることになった。限られた予算や設備の実情な



ブラットイーズ取締役会長の隅田徹氏。社屋として使われている古民家のまわりにめぐらされた縁側は隅田氏の発案で新たに設けられ、社員たちの憩いの場所に。

オフィスは一見、昔ながらの古民家だが、徹底した耐震補強がなされている。敷地内の広場では、映画祭や七夕祭りなど、町民を巻き込んだイベントが行われる。



どをきちんと告知した上で、それでもなお神山を選んでくれたアーティストが訪れるようになる。いわゆるよそ者を受け入れる土壌が形成されるなか、二〇〇四年

NPO法人グリーンバレーを設立。二〇〇八年から「ワーク・イン・レジデンス」と名付けられた移住支援が進められるが、そのスタンスもまた独自。

「例えば、神山にはバン屋さんがないからオープンしませんが、足りないものをこちらで指定して外部の人に補完してもらおう考え方でした。普通は行政が対応するので、公平性を求められます。でも、移住者はずもとの神山の住民とともに、これから一緒になって新しいものをつくり出すわけですから、こちらが選ぶのは当然だと思っただけです」

結果、個性や技術をもった人々

寛容性と多様性を併せ持つ田舎町

が神山に興味を持ち、カフェ、ピッツェリア、オーダーメイドの靴店などが誕生する。同時期、神山町では全国に先駆けて光ファイバー網を整備し、東京よりも快適な高速通信が可能になった。ほかとは少々異なる移住の流れや通信環境のうわさは少しずつ広まり、IT企業をはじめとするサテライトオフィスの場として選ばれるという次の幕が開く。

二〇一三年から神山にサテライトオフィスを出し、自らも移住した東京・恵比寿に本社のあるブラットイーズ取締役会長の隅田徹氏によれば、発端はBCP（ビジネス・コンティニュイティ・プラン）の一環としての拠点分散の検討だったという。業務の主軸は、映像コンテンツの編集、配信。ベンチャー誘致に動く全国一九の自治体が候補にあがるなか、おもしろそうな田舎があるとの情報を得て神山を訪れ、グリーンバレーを紹介された。



鮎喰川沿いの宿泊施設「WEEK 神山」はブラットイーズの隅田氏らが中心となり、企業や個人からの出資を得て完成。向かいに位置する神山バレー・サテライトオフィス・コンプレックスとも連携しており、ビジネスユースも多い。

「ほかはすべて行政が窓口だったので、明らかにムードが違っていたんです。来たければ来れば？という対応がとってもらい、都会的な感じで、印象に残りました」

よそでは減税をはじめ多様な誘致策が提案されたが、一時期のメリットよりも長期的な環境を重視し、神山が選ばれた。

神山と東京という勤務地の選択は社長を含め肩書に関係なくでき、評価や出世に影響することはないとスタッフに明示したものの、当初、東京を離れたのは先導

神山バレー・サテライトオフィス・コンプレックスの案内役を務めるコンシェルジュの木内康勝氏。木内氏の後ろの書棚をはじめ神山杉を用いた内装は、神山メイカースペースのアーティストたちが手がけている。



する隅田氏ひとり。しかしながらその後、神山での体験滞在や出張を経て、移住を希望するスタッフが出てくる。さらには新たな事業展開のための公募により、地元や徳島県内からの雇用が生まれた。

「今の新卒の中には、高学歴でとがったセンスで、地方志向の人

がいる。皆と同じような就職活動をせずに地方で暮らしたいという人が存在するのを、募集して初めてわかりました」

もとは造り酒屋だった古民家には、パソコンやモニターがところ狭しと並ぶ。スタッフは神山に一八人、東京は約九〇人。離れているとはいえ、マネジメントツールを使えば業務の進捗やスタッフの状況は把握できる。納品はインターネットを利用し、備品は通信販売で注文の翌日に配達。東京にいても神山にいても、仕事を進める上では全く変わらないと隅田氏は話す。

築二〇〇年の古民家を借りて住む隅田氏は、事務所の敷地内でイベントを開催するなど、地元と積極的に交流。神社や公道の清掃など、東京では想像もなかった地域住民の共同作業にも、新鮮な驚きを持ちつつ参加する。

「この町は何でも、基本的にボランティアなんです。『絶対』、と決めてしまうと不参加の人に対して険悪な空気が生まれますが、上手にルールができています。何かをまとまってやるわけではなく、こ

れもあり、あれもあり。人口の減少よりも、その結果、人が偏って排他的になるのが田舎の問題ではないかと僕は思っているんです。神山には寛容性と多様性がある。いいかげんというか、緩いというか……」

うれしそうに笑いながら語る隅田氏の表情は、神山での毎日と人のつながりを楽しんでいることを物語っていた。

一軒の店が変えた 人々のライフスタイル

単に移住者が増えただけではなく、町の人々の生活や意識に変化をもたらす人が目立つのも神山の特徴だ。「カフェ・オニヴァ」のオーナー齊藤郁子氏もまた、然り。

ももとは、東京に日本人を置く世界的IT企業Apple（アップル）の社員。アウトドア仲間の友人が神山に移転したのがきっかけで、二〇〇三年に初めて神山を訪れたが、最初から移住や今のビジネスを考えていたわけではなかったそう。

「東京での暮らしは刺激的でし

かつて造り酒屋だった建物は、軽トラック、山の所有権とともに売りに出ていた。エコハウスの建築など、山の活用に関しても齊藤氏の夢は広がる。



たし、大きな仕事にチームで取り組むわくわく感もありましたが、年をとるとともに人生の質について考えるようになったんです。もともと自分でクリエイティブに物事を決められる暮らしはないかなと模索していました」

やがてインターネットで神山の古民家が売り出されているのを見つけて、購入。集客について周囲から懸念する声もあるが、二〇一三年十二月にカフェ&ビストロをオープンする。

「どんなところでも、おいしいければ人は来てくれる、との思いがありました。高い家賃や給料を払う東京の飲食店では、採算を合わせるためにどこかで妥協すると思

カフェ・オニヴァの齊藤郁子氏は2015年に株式会社化した際、ともに店を支える3人のスタッフと株を等分。「物事は皆で決める。責任も四等分でもいいと思っています」と話す。



うんですね。でも、ここでは家賃がいらないし、よい生産者さんが近い。どんなに高くても、できるだけ自然に近い食材を使い、本当に自分が食べたいものを出したいと考えていたんです」

おいしいいわさは次第に口コミで広まり、徳島市内をはじめ遠方から訪れる人も。さらには、カフェやワインには縁がないと思われていた地元の高齢者も、扉を開けるようになった。

「おじいちゃん、おばあちゃんが二人で御飯を食べに来られたり、野じまいという畑仕事の終わりや今日はよく頑張ったというときに寄ってくれたり」

店内には薪ストーブがあり、そ

の薪を持参すれば、ワインや料理が無料になる「薪通貨」も次第に浸透。取材中も予約の電話が何度も鳴るほどの人気ぶりだが、店は週休三日。冬場の三カ月を含め、年の半分は休みを取り、国内外を旅する。

その理由は、おいしい発見を神山に持ち帰り、町の人たちと幸せを共有したいから。齊藤氏をはじめ店を支える四人のチームは、二〇一八年夏には、フランス・ボルドーの日本文化紹介イベントで調理を担う。その成果や人の縁がまた、神山にもたらされるのだろう。

アーティストとの共同作業が変化を生む

ものづくりが好きな有志が集まりグリーンバレーと神山町の支援を受けてつくられた「神山メイカースペース（二〇一七年法人化）」の代表を務めるあべさやか氏も、町の人々とのつながりを楽しんでいる移住者のひとりだ。オランダ在住時の二〇一三年にアーティスト・イン・レジデンスで滞在し、三年後にはアイルランド人

の夫スウィーニー・マヌス氏とともに移住した。

「アーティスト・イン・レジデンスで一番印象に残っているのは、町の人との共同作業ですね。道具や材料がそろっていたわけではないし、皆さんがアートに慣れていないわけではないのですが、それでも歓迎してくれて、いろいろな形でサポートしてくださった」

宿舎に山盛りのナスが差し入れで置かれてあったのも驚きの経験だったと、当時を懐かしむ。お裾分けがあたり前の田舎でありながら、年配の世代でも、新しいものに対して好奇心があるのもおもしろかったという。

神山メイカースペース代表のあべさやか氏と、あべ氏の指導のもと、神山杉をつかったレーザーカッターによる作品づくりに励む県立城西高校神山分校の「森林女子部」の生徒たち。

レーザーカッター、3Dプリンターなどの最新機器を備えた「神山メイカースペース」のコアメンバーは一〇名。



アーティスト・イン・レジデンスの際、あべ氏は特産品である梅干しを町の人々に食べてもらってポートレートを撮影するなど、周囲の協力を積極的に得て作品づくりに取り組んだ。





阿波銀行経営役の須見憲昭氏。神山に根を張り、サテライトオフィスが續々と増える状況や町の魅力を体感しながら、地域の金融機関としてサポートを図りたいと話す。

「活動の三本柱は、研究開発と教育、シェア。日々、個々に活動しながら場所を共有し、お互いに情報や知識を交換して、より面白くクリエイティブの高いものを生み出すというものです」

メンバーは本業の傍ら、特徴を活かした授業を行うなどして町と関わりを持つ。あべ氏は、県立城西高校神山分校の「森林女子部」と呼ばれる女子生徒にレーザーカッターを活用したもののづくりを指導する。

「廃材を使い、デザインから考

える商品開発。販売もしています。

最初は何も言えなかったような生徒もやりがいを感じ始め、将来はデザイン関係の仕事につきたいという子も出てきました」

二〇一八年七月には、夫のマヌス氏とともに軽食も楽しめるビールの醸造所「KANIYAMA BEER」をオープン。グラス片手にひととき過ごせる新たな交流の場が、またひとつ神山に生まれた。

「地方創生を意識して移住したわけではありませんが、神山の動きはとても多角的なんです。国内外から集まってくるウェブデザイナーやプログラマー、アーティスト、さまざまな農業に従事する人々。いろいろな人が小さな町に点在して行き交う『人間交差点』。それぞれがとも突き出ているので、飽きることがありませんね」

人が人を呼ぶ 神山独自の流れ

「神山メイカースペース」があるのは、二〇一三年一月に誕生した「神山バレー・サテライトオフィス・コンプレックス」の一角。町

徳島県の新未来創造担当室長の原内孝子氏。神山バレー・サテライトオフィス・コンプレックスには、現場の声を直接聞いて政策につなげたいという思いから、徳島県庁のサテライトオフィスも設けられた。下／地域づくりを担う若者を養成する「神山塾」の拠点としても機能。写真は2018年4月に行われた第10期入塾式。



所有の縫製工場だった建物を利用したコワーキングスペースだ。現在、一三社がここにサテライトオフィスを構え、多種多様な人々が行き交う場となっている。

サテライトオフィスのひとつ、地元徳島県の阿波銀行経営役の須見憲昭氏に神山の状況を伺った。

「徳島県内各地に約六〇のサテライトオフィス企業が進出してきています。その中でも神山は、人が人を呼ぶという流れが強いのだろうなと思いました。町のために何かしたいという方々が移住され、地元の人とも顔負けに町のことを考えていますね」

その背景には、大南氏らが進め



てきた取り組みに加え、焼山寺という四国八十八箇所の十二番札所があることも影響しているのではないかと須見氏は話す。四国ではお遍路さんを接待する文化が根付いているが、十二番札所は最初の難所。くじけそうになる人々を温かくもてなす気質が受け継がれているのかもしれないという。

「東京では朝の満員電車で揺られ、夜暗くなるまで働き、疲れてまた電車で揺られて帰る。でも、自然の中でも、パソコンがあれば仕事ができる。従業員は精神的に満たされる上、給料の水準も変わらない。家賃などの出費も少ないから貯蓄できるし、やりたいこと



外側が白く、内側が赤い杉の断面を活かしてできたコップは、デザインだけではなく保温性にも優れている。



キネトスコープ社代表で「SHIZQ プロジェクト」を立ちあげた廣瀬圭治氏。町役場等と連携して神山杉のブランド化を進めつつ、施主が山で建材用の杉の木を選べる新たな展開も始動。

もできる、子育てにも適している。おかげで、優秀な人材が雇用できるようになったという声を聞きますね」

移住者を含めて町中の人々がSNSで集まる仕組みが構築され、徳島市内でも見ないほど大勢の、しかも世代を超えた人々がイベントに参加しているのも印象深かったそうだ。

二〇一七年九月から三カ月間、というふれこみで始まった阿波銀行のサテライトオフィスが現在も継続しているのは、まだまだ興味深い流れは続くという判断ゆえだという。

自然を守るために 移住者が動く

移住者のなかでは、大阪から本社を移したキネトスコープ社代表、ウェブデザイナーの廣瀬圭治氏の活動も耳目を集めている。築一五〇年の母屋を含めた古民家をオフィス、自宅として利用し、全国から集まった五名の社員とともに本業を進める一方、「SHIZQ（しずく）プロジェクト」という杉を使った商品の開発、販売も行っている。

二〇一二年十一月の移住後、廣瀬氏の心をとらえたのは、三〇年



上／かつては今の3倍の水量があったという町の中心を流れる鮎喰川。初夏には文字通り、天然の鮎が釣れる。下／鮎喰川の上流、約45メートルの「雨乞の滝」は、「日本の滝百選」にも選ばれた神山の観光名所のひとつ。

前と比べて町の中心を流れる鮎喰川の水が三分の一になったという事実だった。その原因は、緑豊かな杉の山。自然のたまものように見えるが、戦後に植えられた人工林であり、林業の衰退とともに間伐されなくなった。結果、光の差さない山の植生は変わり、保水力も失われて川の水が減ったというのだ。

「神山で暮らしていくなら、二人の息子たちの将来のためにも何かしたいと思ったのがきっかけでした。エコといえば森林の保存だと思われがちですが、一秒でも早く、一本でも多く人工林の木を切ったほうが良いという実情を広めたいという啓発活動のため、『SHIZQプロジェクト』を始めたんです」

活動が理解を得るまでには苦難の連続だった。やがてその熱意が周囲を動かし、杉の木を使った器が完成する。中心が赤く外側が白い、建材としては好まれない特徴を逆手に取り、さらには木目を横にしたデザインは、業界では考えられなかった部外者ならではの発想だ。

二〇一七年には、グッドデザイン賞を受賞。丸太を割り、一年半かけて乾燥させ、高度な職人技で仕上げるため、コップでも価格は一万円以上するが、土産や贈答品として観光客や地元の人たちが購入するだけでなく、オンラインでも全国から注文がある。また、海外にも販路が広がっている。

廣瀬氏は子どもたちに杉の器の

春、菜の花が咲く江田地域の棚田は黄色に彩られ、祭りやウォーキングなどのイベントも開催される。



質感を体感してもらいつつ、山について語る授業も行っている。

「僕が本当にやりたかったのは、少しずつ波紋を広げ、町の意識を変えていくということ。木のことをやっているチームだと思われがちですが、水源を守り、一滴でも水をふやしていくという、最初のマインドを忘れないように、ロゴも名前もしくなくなんです」

ゆっくりじっくり 継続が町を変えていく

これまで民間の動きをご紹介してきたが、神山町の行政もまた、民間と連携しつつ、じっくりと歩みを進めてきた。町の現状と将来のビジョンについて、町長の後藤

正和氏にお話を伺った。

「過疎の町、自然は豊か、通信基盤が整っている……。神山はアナログとデジタルが共存しています。過疎対策としては定住人口の増加が必要になりますが、最終目標の前にまずは交流人口を増やそうと、継続的に取り組みを行ってきました」

神山の特産品のひとつが、梅干し。昭和の終わり頃から、町の花にもなっている梅を主役にした「梅まつり」が行われるようになった。さらにはNPO法人神山さくら会が育成した桜の苗を毎年二〇〇本ずつ植えるという長年の努力を経て、現在、なんと六三〇〇本という数に。春には大勢の花見客でにぎわう。



2003年から神山町長を務める後藤正和氏。大手メーカーとのコラボレーションほか神山産のスタチをつかった商品開発は少しずつ広がり、東京の飲食店と地元の生産者が手を組んだイベント「東京すだち遍路」も人気を集めていると話す。

神山つなぐ公社の事業のひとつ、地産地消の飲食店「かま屋」と自家製パンや地元の特産品などを扱う「かまパン&ストア」。「かま屋」のテーブルや「かまパン&ストア」の建物は、神山杉を使用。天然酵母でつくられるパンは、遠路はるばる買いに訪れる人がいるほど人気。



かつて特産品だった温州みかんが凍害で全滅した後、家庭の庭にも実るほど日常的な存在だったスタチを売り出すべく地道なPRを重ね、今や生産量も日本一に。岩手県宮古市との友好連携により、「目黒のさんま祭り」にスタチを提供して二〇年になるという。

新たな取り組みとしては、廣瀬氏の力を借りつつ、神山杉のブランド化が始まった。同時に、後藤氏いわく「山をつくりなおす」対策も検討されている。

「杉を伐採し、落葉広葉樹への樹種の転換を少しずつ図っている」としています。成果が見えるまでには時間がかかりますが、まず

第一歩をやらなければならないことには始まりません」

二〇一六年の四月には、住まいづくりと教育を柱とした一般社団法人「神山つなぐ公社」を立ち上げた。その理由について、後藤氏はこう語る。

「行政というのは、条例や法令に準拠して執行していかなくてはなりません。会計年度も単年度ごとですから、非常に動きづらい。特に地方創生関連の事業は、継続的にやらないと成果を生まない性格のものが多くいます。例えば、人口についても、何か一つやったからといって、急に増えるわけではありません。継続性と民間の手法、

地域の底力—— 神山町

神山つなぐ公社の代表理事を務める榎谷学氏。公社が取り組む集合住宅は、住民以外の町民が利用できる文化施設と隣接。さらなる人と人のつながりを目指すという。



行政とは違ったスピード感をうまく生かして展開していきたいというのが一つの狙いです」

公社の代表理事榎谷学氏によれば、地元の木を用いた町営住宅「大榎地の集合住宅」を建築中とのこと。手がけるのは、地元の大工。手間も時間もかかるが、地域で経済を回し、仕事や技術を継承する目的があるという。

「二〇一八年八月には住宅が建ち、四戸入ります。全体では二〇戸ですが、大工さんがじっくり仕事をこなせるよう一気に進めず、施工期間を長くとしています」

耕作放棄地を利用してできた食材を使う地産地食のレストラン

や、小中高生に向けた食育体験、二〇一七年から始まったオランダの中高生との交流など、公社と民間が連携した取り組みはフィールドが広い。

「最終的には神山に住んでもらいたいのですが、それは結果であって、今はまず、より多くの人たちとの関係をつくっていききたいんです」

そう話す榎谷氏の言葉に、少しずつ、少しずつ山を彩るようになった桜の景色が胸をよぎった。

世代に関係なく 人の意識は進化する

アーティストのあべ氏が「人間交差点」と表現したように、事実、神山では人と人との出会いが町の活性化につながっている。さらには住民の意識も変わってきていると、グリーンバレーの大南氏は話す。最近、徳島市内の高校に通う神山出身の生徒たちが、地元の自慢をするようになったというのだ。加えて、とある高齢者の発言にも驚かされたという。

「俺はもう七五歳だからいつ何

が起こっても不思議ではないが、神山の変化がどう続いていくのか見られなくなるのがつらい。でも、まだ五、六年は頑張れると思う。自分にできることがあるなら言ってみよう……。普通のおじいさんですよ。若い子は柔軟に自分を変えられることができると思っていました。が、年齢は関係ないですね」

自分たちの活動は、プロジェクトそのものを考えることではないとも大南氏は語る。

「僕らの想像力を越えたような人たちがやってきて、物事が起こりやすい状態をつくり出していく。プロジェクトを生み出す一つの場、装置としての神山町、というのをつくりたいんです」

神山では移住者が地元の人に何か提案すると、必ず返ってくる徳島弁がある。

「やったらええんちゃうん」

軽く力の抜けた、プラットイーズの隅田氏のいう「緩い」感じが、なにかを始めようとする人々の背中を心地よく押すのだろう。頑張ってもいいし、引き返してもいい。阿波銀行の須見氏が話していた、難所に向かうお遍路さんを見

守る思いが確かに受け継がれているのかもしれない。

今は浅瀬が続く鮎喰川だが、町長の後藤氏が幼い頃は泳げるほど水量が豊富だったそうだ。桜の木がさらに増え、森が生まれ変わる未来、川で再び子どもたちの歓声があがる……。その頃、どんな人たちが、この神山に暮らしているのだろうか。神山の物語は、まだまだ続く。



各所でインタビュー中、ウグイスやカエルの鳴き声が幾度となく聞こえたほど、自然豊かな神山町。300～1500メートルの山々に囲まれ、町の8割以上を山地が占める。